

弥生時代後期の注口土器について

川村 雪絵

1. はじめに

平成7年11月から12月にかけて行われた京免遺跡の発掘調査では、弥生時代の溝（S D 1）より後期前半を中心とする土器が多数出土した。その中でも特に、注口をもつ土器は、これまでの報告をみる限りでは津山市内ではじめての出土であり、重要な資料であるといえる。そこで小稿ではこの注口土器について、これまでの研究を参考にしながら若干の考察を行いたい。

2. 注口土器に関する研究史と現状の課題

弥生時代の注口土器は、中期後半を中心にみられるものと、後期後半から古墳時代初頭を中心にみられるものの二者がある。前者は広島県北部から岡山県西北部が分布の中心で、脚台付きの鉢形土器に注口の付いたものである。妹尾周三はこのタイプの土器について編年し、分布や形状の特徴から、三次盆地を中心とした江の川上流域において成立したものと考えている。また、これらの土器が墳墓に供献されていた状況や、土壤内に意図的に破棄されたような状況を呈して出土していることから、日常的に使用した容器ではなく、特殊な行為に使用した祭器ではないかと推測している（妹尾1992）。後者は鳥取、島根を中心とする山陰地方が分布の中心で、この地域に通常みられる壺形土器に注口を付けたものである。このタイプのものについては藤原敏晃の論考がある（藤原1994）。藤原は注口土器の分類・編年を行い、個々の出土例から、これらの土器が「貼り石」や「置石」などの外表施設をもつ墳墓に多くみられ、四隅突出形墳丘墓に埋葬された部族連合の長の配下にあった山陰各地の部族長の墓に供献された土器のひとつであるとしている。さらに最古の例である島根県波来浜遺跡出土のものの注口形態や分布などから、中期後半の脚台付きのものとの関連性を指摘している（註1）。

また、間壁葭子は出雲地方における医薬技術について、文献や考古資料などを参考にしながら古代の薬物製作法について推測している（間壁1997）。このなかで医薬に関係すると思われる考古資料として弥生時代の脚台付きの鉢形注口土器や壺形の注口土器などが取り上げられており、これらの土器が祭祀の場に供献された薬物をいれる、あるいは薬草を煎じるための容器であったとしている。

以上、弥生時代の注口土器について主な研究史をあげた。各論考とも様々な角度からの考察がなされており、弥生時代の注口土器についての歴史的位置づけはなされた感がある。

しかしあえて問題提起するならば、後期後半に盛行する壺形の注口土器の系譜についてはまだ漠然としている点を指摘したい。今回の京免遺跡の発掘調査によりあらたに出土した1個の注口土器は、この問題を考える上で重要であると思われる。また、注口土器はその出土状況から、非日常的に使用する容器として考えられていることに関して、最近の出土例を取り上げながら再検討したいと思う。その前提として、まず壺形の注口土器の編年作業を行うことにする。なお、用語の統一を図るため、脚台付きのものを「脚台付注口土器」、壺形のものを「壺形注口土器」とする。

3. 壺形注口土器の編年（第1図）

弥生時代の注口土器には大きく2つのタイプがあることは先述したとおりであるが、ここで壺形注口土器について大まかな編年を行う。編年の基準になるのは個々の注口土器そのもののほか、注口のみの

場合などは確実な共伴遺物などを参考とする。筆者は基本的には藤原の編年案に賛同しているので、従来の編年と大きく変わることろはないが、あらたな出土資料の検討を含め整理したい。また、併行関係を明確にするために、山陰地方の土器編年区分をカッコ内に提示した（註2）。

1期（V-1様式）

京免遺跡のものがあげられる（第1図1）。従来の編年ではこの時期のものではなく、次の波来浜遺跡出土例を待たなければならない。口縁部は端部を上下に拡張させており、端面には3条の凹線文を施す。上半部のみの出土であるが、頸部から体部にかけては壺というよりもむしろ甕の形状を呈しており、内面は頸部直下よりヘラ削りが施されている。短い円筒形の注口を付ける。

2期（V-2様式）

壺形土器に注口の付いた形のものである。波来浜遺跡の一例のみである（同2）。口縁部はわずかに外傾して立ち上がり、端面には数条の凹線文を施す。胴部最大径付近に把手を付ける。注口部分は欠損しているが、斜め上方向に円筒形の短い注口が付くものと思われる。

3期（V-3様式）

外反する口縁部をもち、端面は櫛描きの直線文を施す。体部は球形をなし、上半部に把手を付ける。島根県的場遺跡、鳥取県秋里遺跡例などがあげられる。的場遺跡例は、外面ヘラ削り、内面はヘラミガキ調整（同3）、秋里遺跡例は外面に同心円スタンプ文と平行沈線文を施すもの（同4）、貝殻腹縁と平行沈線文を施すもの（同6）などがある。注口は依然として円筒形を呈する。

4期（出雲：V-4様式 因幡・伯耆：VI-1様式）

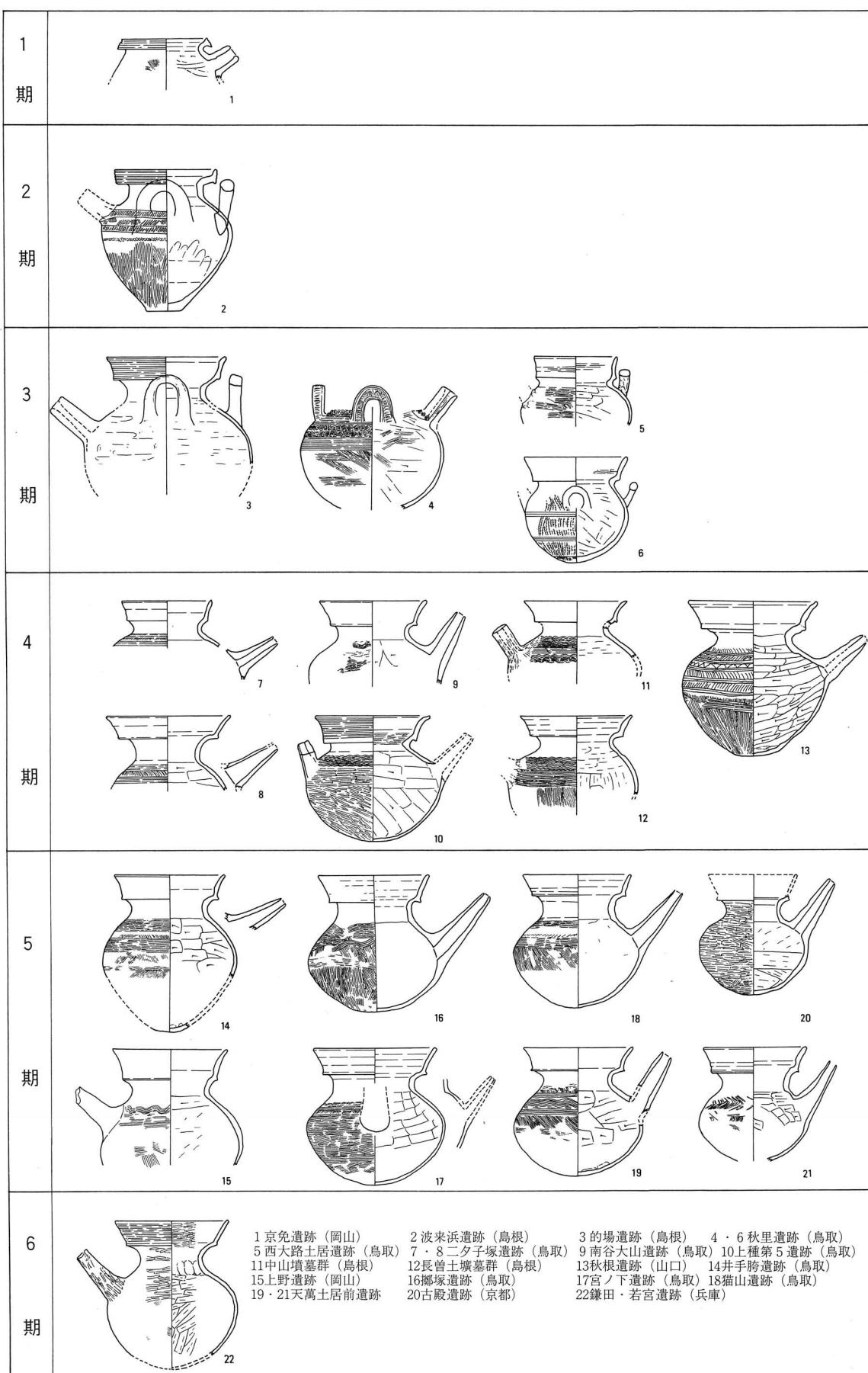
この時期になると資料数は増加する。島根県では中山墳墓群例（同11）をはじめとする4例、鳥取県では上種第5号遺跡例（同10）などの4例があり、山口県では秋根遺跡例（同13）などがあげられる。口縁部はやや大きく外反しており、端面は凹線文のものを一部残すものの、ほとんどがナデ仕上げのものとなる。体部はやや偏平な球形をなす。外面調整は頸部下端付近に平行沈線文、波状文などを巡らすものが多く、胴部最大径付近に付いた注口はこの段階からやや先細りになるものが増加する。全体としては、定型化の傾向にあるが、次の5期と比較すると、やや形態にばらつきのみられる段階である。

5期（出雲：V-4様式 因幡・伯耆：VI-2様式）

弥生終末期から古墳時代初頭にかけてのものである。この時期は4期よりもさらに資料数は増加する。ここで注目すべきなのは、但馬や丹後地域など、この段階ではじめて中国地方以外の地域に出土がみられることがある。また、広島県三次市及び庄原市など備後北部地域でもこの時期にはじめて出土する点も重要である。外反する口縁部をもち、体部はやや下膨れの球形を呈する。外面には平行沈線文や波状文などを施す。注口は胴部最大径付近から先細りに長く伸びる形状のものに統一され、壺形注口土器はこの段階で定型化する。

6期（布留式古段階）

兵庫県鎌田・若宮遺跡例（同22）のみであり、これ以降はこれまでのところ出土例がみられない。口



第1図 壺形注口土器編年 (S = 1 : 8)

縁部は大きく外反し、端面には櫛状工具による直線文を施す。体部は球形を呈し、胴部最大径付近に注口を付ける。注口形態は前段階と比較するとやや円筒形に近くなっている。また、外面は丹塗りである。

以上の編年は、先述したように従来と大きく変わることがなく、妥当なものと思われる。大きな流れとしては、①複合口縁の形態が、やや内傾ぎみのものから大きく外反するものへと変化し、凹線文が明瞭なものからナデるだけのものになる②胴部最大径が器体の上位から下位へと移動する③底部が平らなものから丸底化していく、というように同時期の壺の形態変化と変わらない。この土器に特有の注口形態に関しては、ほぼ円筒形を呈するものから先細りのものとなり、最終段階である6期には再び円筒形に近い形態となる。また、1～3期にかけては個体差があるのに対し、4～5期にかけては定型化の方向に向かっていることが分かる。

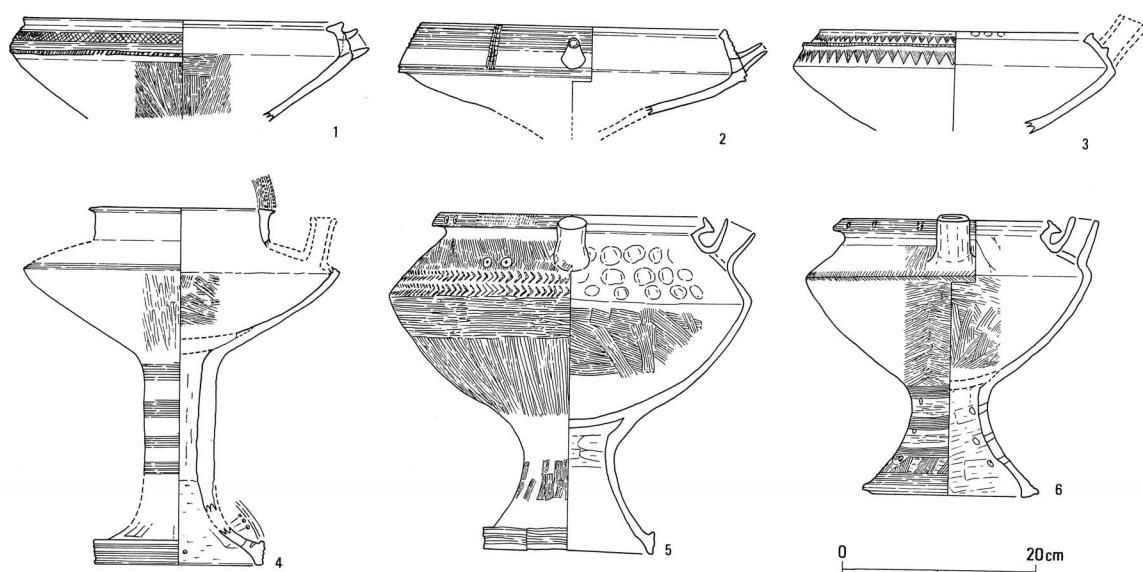
次に、この編年をもとに作成した時期別の注口土器の分布及び出土した遺構をみるとことにより、本稿の主旨である壺形注口土器の系譜について考えたい。また、この点について考える際に避けられない問題として脚台付注口土器との関連性があげられるので、あわせて述べる。

4. 脚台付注口土器と壺形注口土器

①鉢形から壺形への変遷

妹尾は、中期後葉～後期前葉の脚台付注口土器を大きく3時期に分類し、高梁川上流域と江の川上流域に分布するⅡ期からⅢ期のものには杯部の形態が鉢形のものから壺形のものに変化している点で断絶がみられることを指摘している。壺形のものは同時期の鳥取県西半部の伯耆地域、特に大山を中心とする日本海沿岸部の注口の付いていない「脚台付壺形土器」に類例がみられ、Ⅲ期の注口土器がこの地域の土器の影響を受けて成立したものと考えている（註3、第2図）。

この考え方は最近の出土例をみるとことにより理解できる。鳥取県淀江町洞の原1号墓出土の後期初頭の注口土器は、脚台や注口は欠損しているものの、ソロバン玉形を呈する体部や、少し上方に伸びる頸部の形状などは先に示した「脚台付壺形土器」に注口を付けたものということができよう（註4）。上記のような例は、脚台付注口土器のまさに終末期の姿を表すものと考えられ、以降注口を付ける土器は



第2図 脚台付注口土器出土例(II・III期のみ。上段がII期、下段がIII期) (S = 1 : 8)

1 大田茶屋遺跡(岡山) 2 佐久良遺跡(広島) 3 紫雲出山遺跡(香川) 4 佐田谷墳墓群(広島) 5 南庄遺跡(徳島) 6 津寺遺跡(岡山)

壺形のものに限られるのである。

では、壺形注口土器はこの脚台付注口土器の流れを受けて成立したものであるのか。このことを明らかにするため、双方の出土する遺跡の分布や遺構の種類を考えることによって、どのような違いがみられるのかを検討したい。

②壺形注口土器の出土状況（第3図）

脚台付注口土器については先述した妹尾氏の論考を参照する。脚台付注口土器の出土地は主に三次、庄原を中心とする江の川上流域と、岡山県西北部を中心とする高梁川上流域である。遺構としては第一に墳墓、続いて集落内の土壙があげられる。墳墓出土例の中には個々の埋葬施設に供献されたと推定できるものと墳墓群全体や特定の墳墓群に供献されたものとに区別できるとされている（妹尾1992,p111）。これまでの出土例では、住居に直接伴うものは皆無である。

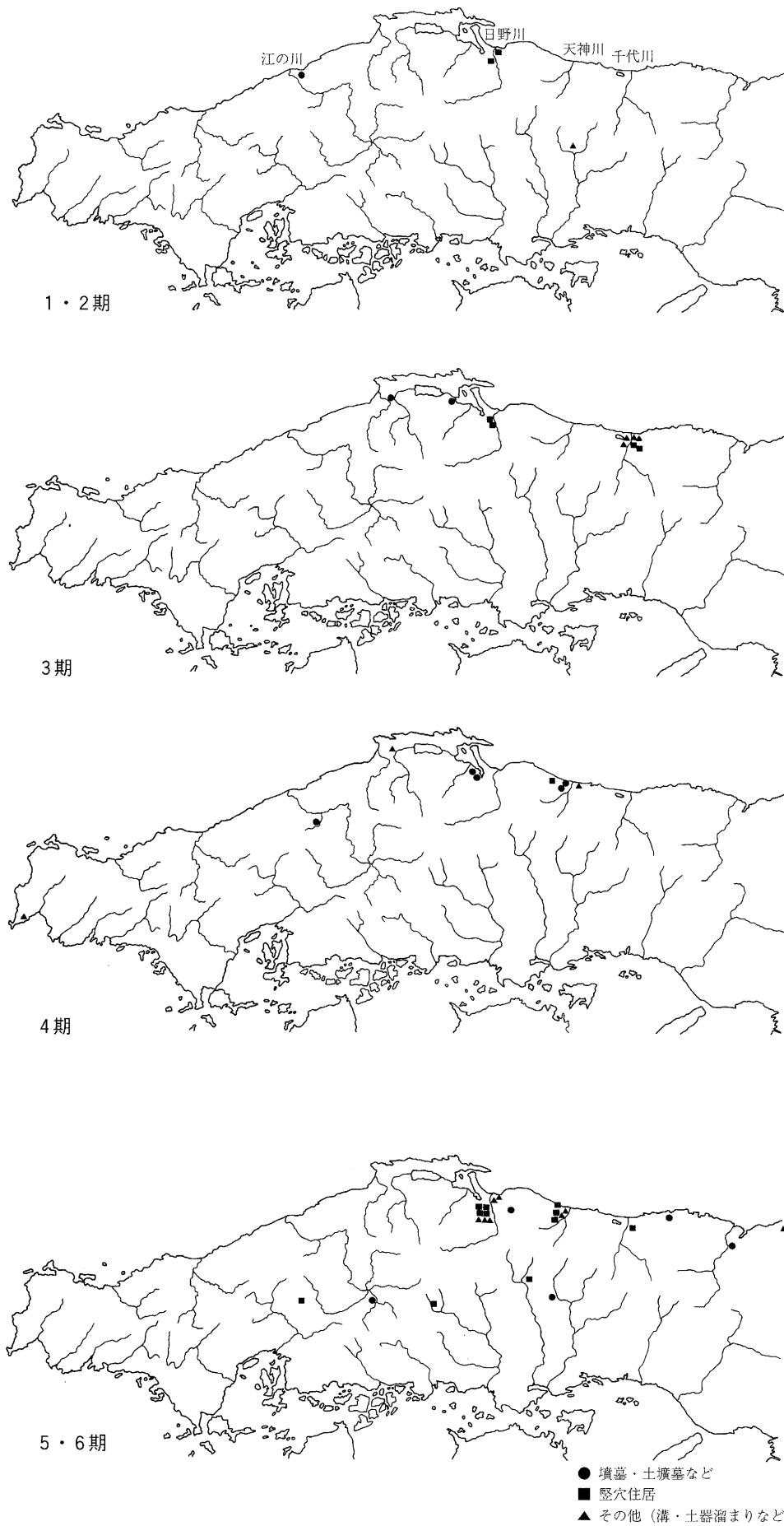
続いて壺形注口土器の場合を考えてみる。図2は、前章の編年に従って作成した分布図である。注口土器の各時期ごとの分布を示すとともに、どのような種類の遺構から出土しているのかをドットの違いによって示している。これをみると、まず1期のものとして京免遺跡例があり、続いて2期に江の川下流域の波来浜遺跡例がある。3期になると出雲地域一帯に出土がみられるようになり、千代川流域など因幡地域の一部にも出現する。4期にはこれらの地域にあらたに天神川下流域などの伯耆地域が加わり、壺形注口土器の分布は山陰地方全域に広がりをみせる。5期になると、出雲地域での出土は皆無になり、山陰地方のみならず、かつての脚台付注口土器の分布域でもある江の川上流域及び高梁川上流域にもわずかながら出土がみられ、吉井川上流域からも出土するようになる。この広がりは中国地方を越え、但馬や丹後地域など日本海沿岸の北近畿地方まで広がる。このように、壺形注口土器は山陰地方を中心とした広がりをみせており、時期が下るとともに広範囲に分布していることは明瞭である。

次に遺構の種類をみる。第3図では主な出土遺構として墳墓、竪穴住居、それ以外の遺構（溝、土器溜など）の3種類に分けて示した。京免遺跡の溝での出土からも分かるように、出現当初から特に墳墓への供献のみを目的としたものではなかったようであるが、やはり墳墓からの出土例が主体といえよう。2～4期にかけては継続的に土壙墓や墳墓の上面からの出土例が多くみられるとともに、他の遺構からの出土もわずかながらみられる。竪穴住居での出土個体数は4例だが、2箇所の遺跡での出土である。全体的な傾向としては依然として墳墓への供献あるいは墳丘上での祭祀に多用されていたといえる。

5期になるとこれまでの様相は大きく変化する。全体数の増加に伴い、竪穴住居からの出土が大きく増加するのである。墳墓からの出土は広島県と岡山県にそれぞれ1例ずつのみであり、最も盛行する段階に墳墓出土例と竪穴住居出土例の個体数が大きく入れ替わるという特徴をもつことが分かる。

以上から考えられることとしては、壺形注口土器はおおむね弥生時代後期後半に集中してみられるものの、時代が新しくなるにつれ分布の中心が山陰西部から東部へと移動していくこと、また新しいものは墓よりもむしろ竪穴住居からの出土例のほうが目立っているということである。

ここで壺形注口土器の系譜について考えてみる。弥生時代における注口土器の分布の中心は中国地方に限定してよいと思われる。しかしそのうちでも中期後半から後期前半を中心としてみられる脚台付注口土器の場合、出土例の多くが墳墓あるいは土壙墓といった埋葬行為に伴う供献と推定できるものが多いという特徴をもつ。これに対し、後期前半から古墳時代初頭を中心にみられる壺形注口土器は、最も盛行する弥生終末期（編年ではV期）には竪穴住居をはじめ、埋葬施設以外の出土がほとんどを占めている。このことは、脚台付のものから壺形のものという形態の変化に大きく関わっているのではないだろ



第3図 時期別にみた窓口土器の出土遺構と分布

うか。つまり、注口土器の主な使用場所が墓から集落へと移行したこと、脚台をなくし、壺形土器に注口を付けることにより、より実用性を重視するようになったと考えられるのである。

壺形注口土器が四隅突出墓や貼り石を巡らせた墳墓だけでなく、集落の中心となるような施設から出土することは先の研究からでも指摘されているが（藤原1994, pp.26-28）、竪穴住居からの出土が増加する現象は注口土器を使用する背景の変化を意味すると思われる。しかし、注口土器はひとつの集落内で平均して1個～2個、多くても10個を越えることはなく、日常生活の場で頻繁に使用されたとは考え難い。竪穴住居だけでなく、溝や土器溜などで、祭祀に伴うと考えられる遺物とともに出土した例も考慮すれば、集落での共同祭祀に伴う道具である可能性が高い。また、煤の付着など使用痕のあることも考えあわせると、液体の煮沸もなされたと考えられる（註5）。

また、先の編年からも分かるように、5期には個体ごとの形態の違いはほとんどみられず、ほぼ同じ形のものに統一される。集落での注口土器の使用は、祭祀形態の地域的な広がりを示すと同時に、画一化を意味すると考えられるのである。

5. 京免遺跡出土注口土器の位置づけ

ここで、京免遺跡の注口土器の位置づけはいかなるものであるのか考えてみる。

京免遺跡出土の注口土器は編年上では1期であり、壺形注口土器の範疇に入るものの中では最古の例といえる。復元すると甕形土器の形態を呈すると思われ（註6）、これまで最古の例とされてきた2期の波来浜遺跡出土のものも、同時期の甕形土器の頸部をやや伸ばした形状を呈しており、これらが出現期のものの特徴を示しているといえる。

脚台付注口土器との関連を考えるのならば、これら初現期の壺形注口土器が大きな手掛けりになるだろう。後期前半は、脚台付注口土器がわずかに残る段階であり、壺形のものはまだみられない。京免遺跡例は器体の上半部しか残っておらず、下半部に脚台が付く可能性も否定できないが、現段階では類例を知らないので甕形土器状に下方に伸びるものと推定する。

分布の点でいえば、脚台付注口土器の最終段階のものは洞の原1号墓例のように鳥取県西部でみられる。これは初期の壺形注口土器とは出土地が明らかに異なっており、直接的な影響はよく分からぬ。口縁部形態などからすれば山陽地域の影響を受けた注口土器といえるかもしれない。いずれにしろ、実用的な土器として製作されたものだが、まだ形態が画一化されていない初期段階のものといえる。壺形注口土器の出土が最も多い因幡、伯耆地域において最古段階のものが多くみられないこと、脚台付注口土器の分布の中心である江の川上流域、高梁川上流域において継続して壺形注口土器の出土がみられないことなど、いくつかの疑問は残るが、京免遺跡出土例のみすべてを語ることはできない。今後の出土例の増加を期待しつつ様々な可能性を考えていきたい。

（註1）藤原は、波来浜遺跡の注口土器が脚台付きの注口土器の分布域と同じ江の川流域での出土であり、体部の形状がソロバン玉形を呈するなどの類似点があることから、中期後半の脚台付きの注口土器を祖形とする考えを述べている。

（註2）第1図の実測図は、文末にあげた報告書や参考文献のものを再トレースしたものである。また、山陰地方の土器区分については主に正岡睦夫・松本岩雄編1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』を参考とした。

（註3）第2図の実測図は、報告書や資料からの再トレースである。また、第2図であげた妹尾編年のII期、III期の脚台付

注口土器のなかには、1の岡山県大田茶屋遺跡や6の同津寺遺跡例などのように、新たに出土したものも編年に基づいて追加している。

第2図であげた土器に関する文献は次の通りである。

岡本寛久編1998 「大田茶屋遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』129 岡山県教育委員会

阿部滋編1984 『佐久良遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財 第27集) 広島市教育委員会

小林行雄・佐原眞1964 『紫雲出』 詫間町文化財保護委員会

妹尾周三編1987 『佐田谷墳墓群』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集)

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

徳島県教育委員会1985 『南庄遺跡発掘調査現地説明会資料』

大橋雅也ほか1995 『津寺遺跡2』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98) 岡山県教育委員会

(註4) 第25回山陰考古学研究集会1997『四隅突出墳丘墓とその時代』参照。

(註5) 研究史の部分でも述べたように、間壁葭子はこの煤の付着が薬物の煮沸行為によるものであるとしているが、今回はその点に関しては追求することができなかった。

(註6) 京免遺跡例は、その形態からは壺形注口土器とは言い難く、2期以降の壺形注口土器と比較するとやや異質なものといえるかもしれないが、遺跡の年代や復元形態を考えると、脚台付注口土器よりもむしろ壺形注口土器の範疇に入るるものと判断した。

参考文献

妹尾周三1992「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集

間壁葭子1997「古代出雲における医療技術への憶測 ー大量の青銅器出土に関係してー」『神女大史学』 第十四号

藤原敏晃1994「古墳出現前後の注口土器について」『京都府埋蔵文化財情報』第51号

県名	遺跡名	所在地	遺構	個数	時期	文献
島根	波来浜遺跡	江津市後地	列石墓	1	2期	1
	中山墳墓群	邑智郡石見町	箱形木棺	1	4期	2
	白枝荒神遺跡	出雲市白枝町	土坑 土器群 遺構外	1※ 1※ 2※		3
	山持川川岸遺跡		土器群	1※	4期	4
	西谷3号墓	出雲市大津町	四隅突出墓	1	3期	5
	の場遺跡	松江市八幡町	土壙墓	1	3期	6
	福富I遺跡	松江市乃木福富町	溝状遺構	2※	—	7
	タテチヨウ遺跡	松江市西川津町	旧河道	3※	—	8
	袋尻遺跡	松江市平成町	包含層	1※	—	9
	安養寺1号墓	安来市西赤江町	四隅突出墓	1	4期	10
	長曾土壙墓群	安来市黒井田町	土壙墓	1	4期	11
	岡成第9遺跡	米子市岡成	堅穴住居	1※	2期	12
	福市遺跡	米子市福市	堅穴住居	1※	5期	13
	奈喜良遺跡	米子市奈喜良	堅穴住居	1※	5期	5
	上福万妻神遺跡	米子市上福万	包含層	2※	5期	14
鳥取	越敷山遺跡群	西伯郡会見町	3C区堅穴住居09	1※	5期	
			12b区堅穴住居01	1※	2期	
			17区堅穴住居01	1※	5期	
			18a区堅穴住居04	1※	3期	
			18a区堅穴住居05	1※	3期?	
			12b区土壙24	1	5期	
	天萬土井前遺跡	西伯郡会見町	土器溜	1	5期	
			黒褐色腐植土包含層	6※1	5期	
			黒褐色粘質土包含層	2※	—	
	井出脇遺跡	西伯郡淀江町	自然河川SD03	1	5期	
			自然河川SD05	1※	—	
	徳樂方墳	西伯郡大山町	墳丘墓	1※	5期	18
	三保遺跡	東伯郡東伯町	堅穴住居?	1※	—	19
	上種第5号遺跡	東伯郡大栄町	堅穴住居	1	4期	20
	南谷大山遺跡	東伯郡羽合町	段状遺構	1	4期	21
	頭根後谷遺跡	倉吉市字頭根後谷	堅穴住居	1※	5期	22
	猫山遺跡	倉吉市上神猫山	貯藏穴	1	5期	23
	二夕子塚遺跡	倉吉市大字谷	5号土壙墓	1	4期	
			6号土壙墓	1	4期	
	擲塚遺跡	倉吉市国府	土坑	1	5期	25
	宮ノ下遺跡	倉吉市国府	堅穴住居	1	5期	26
	遠藤谷峯遺跡	倉吉市国府	堅穴住居	1	5期	27
	秋里遺跡	鳥取市秋里	土坑	1	3期	
			遺構外	1	3期	
山口	西大路土居遺跡	鳥取市西大路	堅穴住居SI03	1	3期	
			堅穴住居SI04	1※	3期	
			堅穴住居SI05	1※	5期?	
			堅穴住居SI04	1※	—	
	岩吉遺跡	鳥取市岩吉	溝	2※	—	30
	西桂見遺跡	鳥取市桂見・高住	遺構外	1※	3期	
			堅穴住居	1※	4~5期	
	秋根遺跡	山口県下関市	溝	1	4期	32
	岡の段C遺跡	山口県大朝町	包含層	1※	—	33
広島	焼け遺跡	山口県千代田町	堅穴住居	1※	5期?	34
	矢谷MD1号墓	三次市東酒屋町	四隅突出墓	4※	5期	35
	岡山A地点遺跡	庄原市上原町	性格不明遺構	1※	—	36
	竜王堂遺跡	庄原市平和町	堅穴住居	1※	5期	37
	観音面土壙墓	久米郡久米町	土壙墓	1※	5期	38
岡山	上野遺跡	真庭郡久世町	堅穴住居	1	5期	39
	井ノ谷3号墳	美方郡浜坂町	古墳	1※	6期?	40
	鎌田・若宮遺跡	豊岡市鎌田・若宮	古墳	1	6期	41
京都	古殿遺跡	中郡峰山町	溝	1	5期	42
	漆町遺跡	小松市漆町	溝	1※	—	43
	千代デジロ遺跡	小松市千代町	溝	1	—	
	相川遺跡群	松任市相川町	包含層	1※	—	44

・個数の欄の※は注口部分のみの出土であることを示す。

・時期の欄の—は遺物が少なく、時期を特定することができなかったことを示す。

表1 壺形注口土器出土遺跡一覧

壺形注口土器文献

- 1 門脇彦編1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』 江津市教育委員会
- 2 石見町教育委員会1976『中山古墳群発掘調査概要』
- 3 三原一将ほか1997『白枝荒神遺跡』 出雲市教育委員会
- 4 川上稔編1996『山持川川岸遺跡』 出雲市教育委員会
- 5 第25回山陰考古学研究集会1997『四隅突出墓とその時代』
- 6 近藤正・前島己基「島根県松江市の塲土墳墓」『考古学雑誌』第57巻4号
- 7 柳浦俊一編1997『福富I遺跡・屋形1号墳』(一般国道9号(松江道路)西地区建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2) 島根県教育委員会
- 8 三宅博士・柳浦俊一編1990『タテチョウ遺跡発掘調査報告Ⅲ』 島根県教育委員会
- 9 曽田辰雄編1998『袋尻遺跡群発掘調査報告書』(松江市文化財調査報告書第76集) 松江市教育委員会
- 10 勝部昭1985『安養寺墳墓群』『古代の出雲を考える4 荒島墳墓群』 出雲考古学研究会
- 11 永見英編1981『長曾土墳墓群』 安来市教育委員会
- 12 米子市教育文化事業団編1993『岡成第9遺跡』(米子市教育文化事業団文化財調査報告書1) 米子市教育文化事業団
- 13 大村俊雄・大村雅夫ほか1968『福市遺跡』 米子市教育委員会
- 14 下高瑞哉1991『上福万妻神遺跡』(県道金屋谷米子線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書) 米子市教育委員会
- 15 中原齊1992『越敷山遺跡群』 会見町教育委員会
- 16 湯村功ほか1997『天萬土居前遺跡』(鳥取県教育文化財団調査報告書53) 鳥取県教育文化財団
- 17 太田正康ほか1993『一般国道9号米子自動車道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 井出脇遺跡』(鳥取県教育文化財団調査報告書31) 鳥取県教育文化財団
- 18 倉光清六1932『古墳発見の伯耆弥生式土器』上・下『考古学』第3巻4・5号
- 19 東伯町教育委員会1981『三保遺跡群発掘調査報告書』
- 20 大栄町教育委員会1985『上種第5号遺跡発掘調査報告』
- 21 牧本哲雄編1994『一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V 南谷大山遺跡 II・南谷29号墳』(鳥取県教育文化財団調査報告書36) 鳥取県教育文化財団
- 22 根鈴輝雄編1990『頭根後谷遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会
- 23 真田廣幸ほか1985『猫山遺跡』 倉吉市教育委員会
- 24 加藤誠司・高取英雄編1994『二夕子塚遺跡発掘調査報告』(倉吉市文化財調査報告書第82集) 倉吉市教育委員会
- 25 高野政昭ほか1978『擲塚遺跡発掘調査報告』 倉吉市教育委員会
- 26 名越勉ほか1976『宮ノ下遺跡発掘調査報告』 倉吉市教育委員会
- 27 倉吉市教育委員会1971『倉吉市国府字遠藤谷峯遺跡』
- 28 山耕雅美・原田雅弘ほか1990『秋里遺跡(西皆竹)』(鳥取県教育文化財団報告書25) 鳥取県教育文化財団
- 29 a 谷口恭子・藤本宏之編1993『西大路土居遺跡』 (財)鳥取市教育福祉振興会
- 29 b 谷口恭子・前田均編1997『西大路土居遺跡Ⅱ』 (財)鳥取市教育福祉振興会
- 30 谷口恭子・前田均編1991『岩吉遺跡Ⅲ』(鳥取市文化財報告書30) 鳥取市教育委員会
- 31 牧本哲雄編1996『西桂見遺跡・倉見古墳群』(鳥取県教育文化財団調査報告書46) 鳥取県教育文化財団
- 32 下関市教育委員会1977『秋根遺跡』
- 33 梅本健治編1994『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(N)』(広島県埋蔵文化財センター調査報告第132集) 広島県埋蔵文化財センター
- 34 沢元史代・道上康仁編1990『本郷遺跡・焼け遺跡』(広島県埋蔵文化財センター調査報告第88集) 広島県埋蔵文化財センター
- 35 広島県埋蔵文化財センター1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』
- 36 篠原芳秀編1994『岡山A地点遺跡』(広島県埋蔵文化財センター調査報告第126集) 広島県埋蔵文化財センター
- 37 伊藤公一・椿不二美1994『竜王堂遺跡』(広島県埋蔵文化財センター調査報告第122集) 広島県埋蔵文化財センター
- 38 森田友子編1982『觀音面土墳墓』『稼山遺跡Ⅳ』 久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- 39 山麿康平編1994『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査1』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書91) 岡山県教育委員会
- 40 福本晴夫1988『井の谷古墳群』(浜坂町文化財調査報告書2) 浜坂町教育委員会
- 41 濑戸谷啓編1990『鎌田・若宮古墳群』(豊岡市文化財調査報告書集 1989年度) 豊岡市教育委員会
- 42 戸原和人・藤原敏晃1983『古殿遺跡』『京都府遺跡調査概報 第6冊』 京都府埋蔵文化財センター
- 43 田嶋明人ほか1985『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 44 北野博司編1992『相川遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター
- 45 北野博司編1992『千代』 石川県立埋蔵文化財センター